妻へ

ラジオネーム：のんだ

今なら、諦める病気ではないけれど、十年前に妻に乳がんがみつかり、余命宣告をつけました。交通事故等の残酷な突然の別れよりいかと自らを慰め、本人も家族も残りの日々を意識しての1年半であった。余命宣告通りに妻が無くなり、はじめての喪主をすることになった。その時葬儀社の方が魔法の言葉を授けてくれた。それは、「気持ちですから。通夜で線香番をしながらもいいんですよ。」遺族は長い看病でお疲れでしょう。だから」と言ってくれました。

その言葉に励まされて、無事初七日、納骨、一周忌、そして回忌を重ねていった。今では出がけに、気が向いた時に仏壇にちよつと手を合わせるだけだ。そうなのだ、いっしょうでも気がかけているところも気持ちはある。線香、供花も途絶えがち。葬儀の時の「気持ちですか」といふ葬儀社の人の言葉に甘えているのだろうか。そう思う毎日です。近況報告をします。

一周忌までの日々、一人暮らし。知っての通り、料理のしパーティー

もほとんどなく、家事から家庭のことまで一気に降りかかってきた。いったい何を食べていたのだろうかと思ひます。

次の一年間。つくづく「先に行くものは、逃げ得」遺品の整理処分は遺された者に託されます。思い出の発掘作業は「ゴミ」として捨てる大仕事。写真も子供の生まれる前のは、子供達もいらぬもの。困ったのは君の衣類。あの時の服。特別思い入れのある服。いつか特別の日に着るつもりで買ったであろう値札の付いたままの服。燃えるゴミとして捨てるしかなかった。君は心残りだと思っけれど仕方ないです。

五回忌は11月の間にか過ぎ、一息いたらもう七回忌になっています。生活してゐる足元がみえるようになってきました。料理のパートナーも増え、一人で生きていけると思ひようになってきました。

山登りを始め、ブログを作り、とびだけあるかわからないが、「余の人生」等とは考えない。新たな生きてゐるという意味を作る為一日を生きようと思ひます。次の十二回忌、六年後には私はどんな足跡をのこしてゐるか、期待してゐたわ。

でも、生きていて、一緒に山登りとかしたかった、、、感動を共にしたかった。先に逝くものは損だったかのだよと言つたらしいと思ひます

リクエスト曲

（ 水割り / 山崎ハコ ）